愛国学園大学人間文化研究紀要　第９号　71～84頁　2007年３月

〔研究ノート〕

クレタ島ヴァシペトロ遺跡を訪ねて
—ゼウスはミノア文明の終焉をどう見たか？

矢　後　長　純

まえがき

筆者が所属する日本エーゲ海学会（1985年創設、現会長は千葉茂美明治学院大学名誉教授）では、毎年、ギリシャ・トルコ研修旅行を実施している。会員は、ギリシャ哲学の学者をはじめとして、詩人、画家、ダンサー、朗読家などの芸術家を含め、文系、理系、工学系、ビジネス界など、あらゆる分野からの好学の士で、学生は会費無料である。これまでに本学からも学生多数が、年に6回開催されるシンポジウムに参加してきた。学会設立後、20年を経ているので、研修旅行で訪問した地域や遺跡、地中海の島々などは相当な数にのぼる。

研修旅行ごとに、主たる訪問先とテーマを設定し、会員の中の専門家や現地の学者の講演を聴講したりする。参加者の専門分野は、まったく異なるがそれぞれの立場で得るものは限りなく多い。筆者ら（筆者と学会会員で本学研究生3年の齋藤彩香）がこの研修旅行に参加するのは、別に加入している計測自動制御学会ロボット・セラピー部会での研究と併せて、現生人類の知の構築とロボットの認知とを比較研究することにある。

このような研修は初めて、という参加者（主として、首都圏の大学生）も少なくないので、毎回、かならずアテネのアクロポリスの丘へ登り、ソクラテスが青年たちと討論をした古代アゴラを訪ね、アテネ考古学博物館も見学する。どこへ行くにしても、また何度訪ねても文化財に溢れたギリシャ旅行では、いつも深い感動を覚える。

本稿では、2006年春の研修旅行「ペルガモン博物館とクレタ島」で訪問した30箇所近くの遺跡の中で、もっとも小さなヴァシペトロ遺跡について報告したい。イラクリオン考古協会の話では、ヴァシペトロ遺跡を訪問した日本人研究者は、われわれが初めてではないかとのことだった。なお、この旅行で本学では矢後のギリシャ訪問が4回[1,2]、齋藤彩香は2回[3,4]となった。

この研究ノートでは、考古学とは縁遠い筆者らがこの訪問の後、徐々に先史時代のクレタ島の歴史に目を開かされて行く経緯と、ヴァシペトロ遺跡を学びながら、どのような人間文化学的な課題に気付いたか、について報告したい。

１．研修のスケジュール

研修の概要を表１に示す。航空機やフェリー、ホテル、移動に必要な専用マイクロバスなどの手配は、東京に支店を置くヨーロッパの大手旅行会社に委ねた。今回の参加者数は、旅程の途中からの参加や途中での帰国者などを含めて15人ほどだった。

今回の研修では、トルコのペルガモン遺跡の見学をしてから、ギリシャに入国する計画だった。しかし、出発直前の2006年2月に、高病原性鳥インフルエンザの人への感染がトルコのほとんどすべての都市で発生したとの報道があったため、ペルガモン訪問は急遽、取りやめとした。その代わりに、ベルリンのペルガモン博物館を見学することとし、利用する航空機もトルコ航空からルフトハンザに変更した。因みに、最近になって高病原性鳥インフルエンザは、中国青海省の景勝地青海湖の白鳥で発生し、トルコへ伝わったことが判明している[5]。

ベルリンに到着して一夜明けた早朝、ホテルではボヤ騒ぎがあった。全員館外へ退去という非常放送には驚いたが、幸い一同無事だったことは、愛国新聞の大学版に斎藤がエッセイで報告した[4]ので、ここでは省略する。

春とはいえ、寒気厳しいベルリンからアテネ経由クレタ島へ飛ぶと、そこはもう花盛り、気温も日本の5月並みだった。

研修は最近、ようやく山道が整備されて自動車通行が可能となったヴァシペトロ遺跡から始まった。その後、表１にあるように、クレタ島内の多数の遺跡を訪ね、さらにアテネに戻ってからはペロポネソス半島の遺跡やアテネ周辺の島々も訪ねた。最後に毎度のことながら、アテネのアクロポリスの丘や古代アゴラ、プラトンのアカデミア跡地の散策などで感慨に耽り、また現代のアテネ市の市場で、斎藤も発起人となったエーゲ海学会の分科会ギリシャ料理研究会[6]のための珍しい産物を買い求めたりした。

表１．日本エーゲ海学会「ペルガモン博物館とクレタ島」研修旅行（2006年3月22日～4月5日）スケジュールの概要

月日	研修先または旅程
3月22日（木）	成田発ベルリンへ
3月23日（金）～24日（土）	ペルガモン博物館等の見学、ライプチッヒのバッハ記念館、森鴎外記念館訪問
3月25日（日）	移動。アテン経由クレタ島イラクリオン市へ
3月26日（月）	ヴァシペトロ遺跡、クノソス宮殿、考古学博物館
3月27日（火）	ゴルティス遺跡、フェストス遺跡、アギア・トリアーダ遺跡、マダラ海岸
3月28日（水）	ザクロス遺跡、アギオス・ニコラオス遺跡、クリッツア遺跡、グルニア遺跡、ラト遺跡
3月29日（木）	マリア遺跡、ディクスティの洞窟
3月30日（金）	アテネのアクロポリス再訪、考古学博物館再訪
3月31日（土）	ポロス島の神殿遺跡探索、イドラ島の遺跡探索、エギナ島の遺跡探索
4月1日（日）	アルゴリス地方再訪（古代コリント遺跡、ミキーネ遺跡、エピダウロス古代劇場遺跡）
4月2日（月）	デルフィ遺跡、アラヴァ遺跡、オシオルーカス教会遺跡
4月3日（火）	プラトンのアカデミア跡地訪問ほか
4月4日（水）～５日（木）	移動・帰国

2．ヴァシペトロ遺跡

アテネから空路約300キロでクレタ島（ギリシャ行政区分ではクレタ地方）イラクリオン県の首都イラクリオン市に着く。そこからヴァシペトロ（*Βαθύπετρο*、英語表記ではVathypetro）遺跡へ通じる山道が、昨年、拡幅舗装され、クレタ島を縦断する自動車道路に接続されたとの知らせに、学会では早速、ヴァシペトロ遺跡の見学を行程に組み入れたのだった。小さな遺跡ということは分ってはいたが、まだ日本人研究者は訪問していない上、国内では最近の専門書[7]にもまだ紹介されていない場所である。

イラクリオン市中に研修拠点としてのホテルを定め、そこから毎日、専用マイクロバスで各地に出かけることとした。ヴァシペトロ遺跡はその最初の訪問地だった。イラクリオンから南方へ約15キロでアルハノスという小さな町へ着く。クノッソス宮殿に近いこの町は、サントリーニ島大噴火の前から栄えたところで、すでに4000年以上の歴史をもっている。アルハノスから、そのまま車でさらに山道を登ること、約４キロだった。道路といっても一車線で、やっとすれ違えるかという程度だったが、アルハノス付近からは、行き交う車もなかった。クノッソス宮殿から南へおよそ10キロの位置であった。

午前10時、うす曇り、無風、気温は25度ほどか。大きな遺跡にあるようなチケット・ブースや土産物店などはなく、標識があるだけだった（写真１）。欧米の観光客も来ないことを意味している。イラクリオン考古協会に派遣を依頼した遺跡ガードマン2人もほぼ同時に到着し、遺跡を囲むフェンスの鍵を開けてくれた。

写真１　ヴァシペトロ遺跡の標識

遺跡は、南側に広大な平野を望むかなりの高さの台地にあった。一歩足を踏み入れて驚嘆した。一部は復元され、また屋根もつけられた部屋もあったが、建造物全体には徹底的な破壊があったものと思われたことである。後に発掘当時の写真[8]を見てさらに驚いた。長さ１メートル、縦横50センチもあろうかという巨大な土台石まで、動かされ、緩んでいたのである。考古協会からのガイドの話では、イラクリオン市の北約120キロのサントリーニ島の大噴火の際の地震の影響だという。

ギリシャの遺跡ガイドは遺跡解説の専門資格をもつ人で、日本の学芸員にあたる。今回のガイドは女性で、解説は発音の極めて明瞭な現代ギリシャ語で行い、われわれの英語での個人的質問には練達な英語で答えてくれた。

筆者らは現代ギリシャ語を学会主催の講座で受講し、とくに矢後は７年半に及んだ講座を一通りすませている。齋藤の受講もすでに3年目である。筆者は修了証（*Βεβαίωση*）も受けているし、同行の人たちのなかにもそういう人が５人ぐらいはいる。しかし、残念な

写真２　ヴァシペトロ遺跡の遠景
歩いているのは、同行の人々

がら、ベベーオシーの1枚ぐらいでは、ガイドのことばのごく一部しか聞き取れない。ギリシャ語を同時通訳に近い速度で通訳できる人は、学会事務局の大井一徹先生である。大井先生は、アテネ大学で11年もギリシャ語学の研究生活をした方である。

さて、ヴァシペトロ遺跡に話を戻そう。ヴァシペトロというのは、遺跡からさらに約４キロ南にヴァシペトロ村という寒村があるので、その名をとったとのことだった。ギリシャ語でヴァシ(*βαθύς*)は深いという形容詞、ペトロ（*πέτρο*）は石を意味するが、ヴァシペトロということばの意味は不明、さらにこの遺跡の本来の名称については、今でもまったく未知のままとのことだった。ここで人々が活躍していたのは、線文字Ａ（ミノア期）またはＢ（ミケーネ期）の時代だが、記録が発見されていないそうだ。

もし、この遺跡が大災害で崩壊したのであれば、ここで亡くなった人たちも多数いたに違いない。その人たちの苦しんだ跡地を、見学とはいえ、われわれ一行は、ずかずかと歩き回っているのである。しかも、この遺跡は崩壊後、再建されることなく、三千年以上もの間、少しの盗掘も受けず眠っていたという。この遺跡の崩壊と同時に、当然、近くのクノッソス宮殿も崩壊したはずである。海岸近くに散在する多くの町や村も地震と津波で大きな災害を受けたに違いない。ガイドは、繁栄を続けていたミノア文明がこのときに終焉を迎え、代わってギリシャ本土からミケーネ文明がもたらされたようだ、と説明してくれた。支配者の交代である。

地震が社会、経済、文化を完全に破壊したために支配者の交代がおこった、というのが通説のようだった。この話を聞いたときには、納得するような気持ちだったが、文明の交代というのは、そんなに簡単におこるものだろうか、という疑念が心のどこかでうごめいていた。実際に、この通説に対して専門家は反対してきたことがあとで分かった[9,10,11]が、2005年にも新たに反証があげられていた[12]ことは、帰国後に知ったことだった。

遺跡の一隅に、高さ約２メートル、ほぼ４メートル四方の小部屋があり、中にオリーヴや葡萄を絞ったと思われる楕円形（長径60センチ、短径40センチほど）の平たい石があった。英語では、olive-press というそうだが、縁がついているこの石は、クレタ島内で発見された最古の搾り器とのことだった[13]。奇跡的に破壊を免れたようだった[8]。最古といっても、ここではじめて葡萄酒を作ったという意味ではない。理由はいろいろ考えられるが、搾り器という器具は石製であっても数千年にわたっての維持保管が意外にも難しかった、ということである。

ほの暗い室内に入って、それを熟視することはできなかった。前回のニコポリス研修[3]の際もそうだったが、春先はこういう室内に無数の大型の蜂が飛び交っていて、非常に危

険なのである。こんな辺鄙なところで、蜂に刺されでもしたら、まずは助からないだろうと思うと、中へ入ろうという人もいない。

遺跡の西側に峻険な山があり、南側を顔とすれば、眠るゼウスに似た山容だった。標高約2500メートル、ユクタス山（*Γιούχτας*、英語表記はYouktasまたは Juktas）という聖なる山だった。ガイドは、この地域の人たちが、この山を拝み、ゼウスに地震からの救助を祈っていたに違いない、と話してくれた。このことばには、数千年前のゼウス信仰をいまでもガイド自身が抱いているようなニュアンスがあった。

写真３　ヴァシペトロ遺跡の一部

写真左手奥の階段の左側に絞り器室があった。写真中央奥、四本の柱の附近に正面玄関があったと推定されている。

この遺跡や近隣でのゼウス信仰は、紀元前５～４世紀の古典古代ギリシャでの洗練されたものではなく、かなり初期のものだったらしい。宗教の初期というものは、一体どのような状態かは、推測すらできないが、意外に熱烈なものがあったかも知れない。

では、この遺跡は何の遺跡か。発掘にあたったスピリドン・マリナトス教授（1901-1974）[8]らも、遺跡の構造が他の大規模な遺跡とは異なるので、判断に相当に苦心したらしい。結局、中心部は、東西に35メートル、南北に45メートル、面積は1575平方メートルという小規模であること、住居としての特徴があまりないこと、人の背丈ほどもある大きな甕が16個も出土したこと、近隣は今でも水分の豊富な地域で葡萄の栽培が盛んであること、などから、この地域のぶどう酒やオリーヴ油の製造所であり、かつ倉庫だった可能性が高いとしている。住んでいた人としては、近隣農村の指導者のような立場の人ではないかと推察している[8]。

建造物の内部では、大きな甕の中に小さな壷が多数混在していたことから、二階があったという推測もされている。壷は二階に並んでいたとすれば、解釈がつくのである[8]。

この遺跡が後世のわれわれに伝えていることは、単に考古学上の問題に限らず、人間文化を学ぶ筆者らにとって無限に多いと実感した。そして帰国したら、くわしく勉強しようと考えたのである[4]。

３．文献収集

帰国後、早速、文献収集にとりかかった。ギリシャ滞在中に求めた最新のガイドブック[13]やインターネット[14]やなどを手がかりにし、おぼろげながらヴァシペトロ遺跡の様子が分ってきた。中でも注目したのは、スウェーデンのMary Blomberg and Goran Henriksson の論文[12]だった。ウプサラ大学航空宇宙物理学教室からの報告である。内容は、ヴァシペトロ遺跡が青銅器時代の農業暦制作の拠点だったのではないかというもので、本稿でも後章で紹介する。

宇宙物理学がギリシャ考古学に貢献する時代が来ていたのか、と感銘を受けたが、さらに考古学の専門論文多数が核物理学の学術雑誌に発表されていることも知った[15,16]。それらは、筆者のかつての勤務先放射線医学総合研究所（千葉市稲毛区）の図書室で読むことが出来たが、長榮一氏によれば、1995年には第一回宇宙考古学専門家会議がユネスコで開催され、考古学と探査衛星技術との学際協力が討議されたとのことであった[17]。

こうした重要文献が分かれば、あとはいわゆる芋づる式に多数の文献にあたることができる。実際に、この論文からヴァシペトロ遺跡の発掘責任者は、上記のアテネ大学考古学教室のマリナトス教授（1901-1974）であることも判明したのである。ここまでくれば、文献調査は終わったようなものだと楽観し、とりあえず、アテネ大学大学院哲学部考古・美術史学科博士課程に留学中の山口大介氏にメールで論文収集を依頼した。

山口氏は、第１回目の斎藤のギリシャ訪問記[3]にも登場した方である。現在、アテネ国際空港近くの通称ライオン洞窟（*Σπήλαιο Λεονταρίου*）の発掘[18]その他の発掘を精力的に進めている新進気鋭のギリシャ考古学者である。

すぐにメールの返信が来た。「明日から発掘に出かけるので時間的余裕は十分にないけれども、論文はコピーしてすぐに送る」、ということだった。ペロポネソス半島の発掘現場に数ヶ月は滞在の予定らしく、文献収集の依頼は、きわどいところで間に合ったのである。

しかし、やがて送られてきた1949年から1959年にかけての論文７編[8,19-24]を目にしたときには愕然とした。文章が、かつてのギリシャ公用語のカサレヴサ（*Καθαρεύσα*）で書かれていたのである。

ギリシャ語の歴史は、古典ギリシャ語に加えて、純正言語とか擬古典語といわれるカサレヴサと1981年以降に公用語として使用が勧められた現代ギリシャ語とに大別される。カサレヴサは学者語という“あだ名”もあるくらいで、大井先生が留学されていた1970年代までは、大学の講義もカサレヴサで行われていたそうである。しかも入学試験には、古典ギリシャ語が必須で課されていたそうである。つまり、アテネ大学に留学するには、カサレヴサと古典ギリシャ語の双方をマスターしていなければならなかったし、日常生活には現代ギリシャ語が必要だったのである。最近のアテネ大学では、講義は現代ギリシャ語で行われているそうだが、過去の書籍や行政文書などを読むには、カサレヴサが必要である。ギリシャ全土から秀才が集まるアテネ大学のレヴェルの高さは、推して知るべしというところか。

ともかくも、マリナトス教授の論文は、われわれが学んできた現代ギリシャ語では歯が立たない。辞書も持っていない。現代ギリシャ語を学ぶにしても、オックスフォードの現代ギリシャ語—英語辞典とリデル・スコットの古典ギリシャ語—英語辞典は必須だった。欧米諸国でギリシャ語を学ぶ高校生や大学生が使っているものである。しかし、カサレヴサでは、これらのいずれでも、ほとんど役に立たない。大井先生から、カサレヴサ用の辞書を大小取り混ぜて３冊をお借りし、ほかに動詞変化表を入手して、翻訳に取り掛かった。オランダ医学の解剖学書の翻訳にチャレンジ

した杉田玄白先生らの苦労ほどではないが、翻訳作業は難航を極めている。

まず、書き出しの文章からして意味が掴めなかった。ヴァシペトロ村に遺跡が発見されたという第一報が入ったとき、マリナトス教授は、たまたまイラクリオンで、大戦中にオーストリアが持ち出した出土品の返還交渉にあたっていたらしい。あとで分かったことだが、当時、教授はイラクリオン考古学博物館の館長だった。第二次大戦が終わってまもない1948年9月のことだったそうである。戦中は、ギリシャとオーストリアは互いに敵国だった。

こんな文章を読むと、大戦中、クレタ島ではギリシャ・パルチザンと英軍の連合部隊が、ドイツ正規軍の落下傘部隊との間で激しい山岳戦を繰り広げたということが、実感をもって迫ってくる。しかし、とりあえず今はそういう感慨に耽っている暇はない。カサレヴザを何とか読まねばならない。

そこで難しい箇所は大井先生に指導して頂くほか、アテネのパルテノン大学政治学科の4年生マリア・マルドゥキさんにメールで送り、英訳してもらったりした。マリアさんは、大の日本びいきで、いつか政治学を学ぶために日本に留学したいという希望を持っている女子学生である。大学２年生のころにアテネ・オリンピックがあり、大井先生が道傳愛子さんとNHKの“ワールド・ニュース”を担当したときに、アテネ市内で知り合って以来、学会の研修旅行のたびごとに、家族ぐるみで歓待してくれる間柄になっている。

４．サントリーニ島の大噴火とヴァシペトロ遺跡

ヴァシペトロ遺跡が地震による壊滅的な破壊を受けたということであれば、第一の疑問は、イラクリオン市の北約120キロの海上に浮かぶ小さなサントリーニ島はいつ大噴火をおこしたのかということである。マリナトス教授の第一論文[8]では、BC1600年からBC1500年の間であろうと推測しているが、コーネル大学バナール教授の著書[11]によると、BC1628年と確定されたようである。この年であれば、他の地中海沿岸諸国のいろいろな文化財や記録ともうまく照合できるという。

陶器出土品の形状や模様などを基礎にした編年との関係はどうなるのか、先史エーゲ海世界全体に及ぶ変革がおこりそうである。それには、今後、陶器の原材料の質量分析の成果その他細心技術の導入[15,16]も考えられるだろう。大噴火がBC1628年とすれば、マリナトス教授の推定と70年ほども違うばかりか、ミノア文明とミケーネ文明の交替の時期であるだけに、重大な問題といわざるを得ない。いずれにしても、1948年に発見されるまで、この遺跡は3600年ほども眠り続けていたことになる。マリナトス教授も論文の中で、「遺跡は眠り続けていたかったに違いない。われわれが起こしてしまったのだ。」と述べ、大災害に遭遇した人たちを悼んでいる。

BC1628年というのは、イリアスやオデッセイアスの時代、すなわちトロイ戦争（BC1210年ごろ）よりも約400年もさかのぼることになる。われわれ、ギリシャ学の初心者は、ト

ロイ戦争を神話の時代と考えてしまうのだが、正確な記録がないだけで、BC1600年ごろが決して神話の時代などというものではないことが、この遺跡見学ではっきりと理解できた。イリアスやオデッセイアスの物語の神話性にいかに目がくらまされていたか、あるいは、神話の意味が理解できていなかったかを恥じ入るばかりであった。

そこで、余談になるが、あらためて『オデュッセイアス』[25,26] を読み返し、そこにリハビリテーションにおける現代ロボット工学と共通の課題が扱われていたことに気づき、計測自動制御学会ロボット・セラピー部会に発表することとしたのである。それは、アテネ女神によるテレマホスとオデュッセイアスへの激励の形が、ロボットによるリハビリテーションその他に大きな課題をなげかけていることを扱ったものだったからである[27]。

さて、ヴァシペトロ遺跡が、オリーヴ油や葡萄酒の大量生産と大量保管の場所だったということは、地中海地域の一大交易圏の一拠点だったことを物語っている。それは、ここで働いていた人たちの間に、オリーヴ園や葡萄園の経営、生産、交易など、高度の社会制度が整備されていたことを示唆している上、それらを支える知識、経験が豊富に蓄えられていたことを示すからである。

地域の産物は、驢馬の背に乗せ、あるいは人力でクノッソス宮殿に届けられた後、国内消費分と輸出分とに分けられたのであろう。こんな山奥にまで開墾が行き届き、大量生産がなされていたことは、当然、近隣には多数の農家があったと思われるが、発見されていない。しかし、近くの同時代の墓地からの出土品には高級貴金属製の装飾品が多数、副葬品として発見されているとのこと[12] で、この一帯はかなり裕福な土地柄だったことが窺われる。ここに第二の疑問が浮上する。このような農業が、どのような技術によって支えられていたか、という問題である。

サントリーニ島大噴火による地震でクレタ島のほとんどの都市や農村は崩壊したものと思われ、また、津波によって地中海沿岸部の町々も大きな被害を受けたに違いない。当時まで、先史エーゲ海世界の中心であったクレタ島が一気に勢力をそがれ、青銅器文明としてのミノア文明が滅亡したと考えるのもやむを得ないとも思われる。これが、アテネ大学考古学のマリナトス教授の持論だった[9]。

しかし、一文明の滅亡のメカニズムとは、そのようなものだろうか。台頭しつつあった後続の異文明との長い相互作用があったのではないだろうか。これが、第三の疑問であったし、バナール教授[11] や周藤氏も早くから提出している問題だった[9,10]。

同時期に崩壊したはずのクノッソス宮殿は、ギリシャ本土からミケーネ人が入り、ここにギリシャはミケーネ文明期を迎えることになったらしい。しかし、専門家によれば、クノッソス宮殿の支配者の交代プロセスについては諸説あり、まだ統一見解には達していないようである。ミケーネ文明のクレタ島への浸透が、地震によるミノア文明の衰退を待っていたかのような考え方は、あまりにも短絡的だからであろう。実際に、後述のように、ウプサラ大学からの報告からは、この交代が両文明の相互作用を経過していた可能性もうかがえる。

上記の第二、第三の疑問については次章で述べる。

5．ヴァシペトロ遺跡における農業暦の制作

ヴァシペトロ遺跡の北側、現在の遺跡入り口近くに、マリナトス教授は特殊な構造の小部屋が存在していたことに気付いた。この位置は、後世の農耕の影響を受け、破損がはなはだしかったらしい。この小部屋は当初、宗教行事との関連が推察されたようだったが、最近になって天文観測用の極めて重要なものであったことが、ウプサラ大学のチーム[12]によって指摘された。まだ標識や解説の掲示もなく、地面に僅かに顔を出している数個の石の土台からそれに気付くことは、われわれには不可能だった。

しかし、専門家たちは、そこに東に向かって窓のある小部屋があり、窓には三本の細い石の柱があったと推定したのである。窓からは、かなたに右肩さがりの山の稜線が見えたはずである。日の出の位置は、夏には山の稜線の左方、すなわちやや高いところとなり、また、冬には右方、すなわちやや低いところとなる。

ミノア文明期のBC1700ごろの早朝、この小部屋の中央で壁を背にして人が立てば、春分と秋分の日には三本の柱のもっとも北側の柱の南面、方位角97.7°、仰角10.8°の山の端に、10月22日には中央の柱の南面、方位角111.9°、仰角10.0°の山の端に、そして冬至には右の柱の北面の方位角122.3°、仰角4.1°の山の端に、それぞれ陽が昇るのを見たであろう、ということを解明したのである。10月22日は秋分からちょうど月齢で1ヶ月後である。先行研究によって、ミノア文明期には秋分に続く新月の日が元旦とされていたらしい。したがって10月22日は2月初旬を示すことになる。

こうした研究には、ヴァシペトロ遺跡における経度、緯度においての、今から3700回前の地球公転軌道の計算や月の運行に関する計算が必要だったことは想像に難くない。宇宙航空物理学研究室ならではの成果である。

小部屋についてのこの考え方は、次の考察からも支持されるという。BC8世紀のヘシオドスの記載によれば、10月下旬が耕作開始の時期であった。ヘシオドスの時代と彼が生活していたギリシャ本土の緯度とを考慮すると、10月下旬というのは10月27日ごろに相当し、クレタ島では10月12日ごろということになる[12]。

さらに興味深いことは、ほぼ正方形に近いヴァシペトロ遺跡建造物の東西の方位は、10月22日を検出するための中央の柱と山の稜線の日の出を結ぶ直線をもって決められていたことであった。

一方、西側にも小部屋が発見されていた。同様の構造が他のミケーネ文明の遺跡でも発見されている。上記の天文観測室と同様に、宗教的な行事が行われていた部屋と推測されてきたが、ここは夏至の日に限って日没時の光が、反対側の壁の床に届く日であることが判明したそうである。夏至の日にユクタス山に沈む夕日を見つめていたのは、ギリシャ本土から移住してきたミケーネ人だったのではないか、という新しい問題が浮上したのである。

写真４　ヴァシペトロ遺跡の西側の部分

写真奥の右手にミケーネ方式の天文観測室（夏至の日没測定用）があったと推定されている。

それにしても地域の産業を支える農業暦の制作は、太陽と月の運行に関する厳密な観察による科学的なものであったことが分かった。葡萄やオリーヴをはじめとして地域の農業は勘に頼って行われていたのではなく、科学的な農業暦に支えられていたのである。

６．ゼウスはミノア文明の終焉をどうみたか？

ミノア文明の農業大量生産を支える仕組みは、精密な農業暦の制作にあった。では、ミケーネ文明の進入についてはどうなのか、両文明の交替はどのようにしておこったのだろうか。

ウプサラ大学チームは、近隣の同時代の墓石の方位に関する統計と陶器編年との関係を論じ、ほとんどが東向きのミノア方式であって、西向きのミケーネ方式が少ないことを見出している。このことから、サントリーニ島大噴火の前にすでにミケーネ人たちが少数ながらミノア社会に移り住んでいたことも示唆されるのである。

もしそうであればミケーネ文明は、サントリーニ島の大噴火を期に崩壊したとされるミノア文明社会に、一挙にクレタ島に上陸したのではなく、徐々にミノア文明と交渉しながら、浸透してきたと考えたほうがよいことになる。両文明交替のメカニズムは、ますます興味深い問題になってきたというのが、門外漢のわれわれの感想である。

ゼウスは、ミノア文明期にすでに尊崇されていた。そしてゼウスの眠るユクタス山を、移住してきたミケーネ人労働者たちがヴァシペトロ遺跡で日ごと眺めていた可能性がある。ゼウスは、文明の変遷、交替をどう見ていたのだろうか。

当時、すでにイスラエルにはユダヤ教が成立していたが、僅か400年ほどを経過したばかりだった。一神教と先史エーゲ海世界の多神教とは、どう関わっていたのだろうか。そもそもゼウスは、先史エーゲ海世界の人々の心の中にどんな位置を占めていたのだろうか。

ゼウスは地域によって権能に大きな違いがあるとされている[28]が、それはとりもなおさず、人々の豊かな夢想の世界[29]を表現するものである。遺跡ガイドが説明したように、大災害に見舞われたヴァシペトロ遺跡の人々、クレタ島の人々は、それぞれゼウスに救援を期待して祈ったかも知れないが、一方では、それが無意味であることも知っていたに違いない。

精神科医師村本博士が言うように、現生人類は意識的にせよ、無意識的にせよ、外なる神と内なる神の存在を知っていたと考えられる[30]。外なる神は一神教の神であり、内なる神はわれわれの夢想の世界に生きるわれわれ

自身である。

いずれの神も、西田哲学[31]で指摘されたように、もとはといえば現生人類の純粋経験に由来するものであろう。純粋経験から浮上した後の意識の発展の場が夢想の段階に限られれば、多数の神々の自由奔放な活躍が期待される多神教となり、覚醒意識の世界で洗練されれば一神教になるのであろう。ミノア文明、ミケーネ文明、あるいは現代ギリシャ人にとって、ゼウスをはじめとする多数の神々は、はじめから夢想[29]の世界の内なる神だったのではなかろうか。こうして多彩なギリシャ神話は、現生人類の豊かな心の一面を表現しているのであろう。

今ではほとんどのギリシャ人がギリシャ正教の信者であり、“外なる神”の信仰はかなり固く、国際結婚の際などには高いハードルとなるようである。だが、一方で彼らは今でも、ゼウスやアテネ女神、太陽を尊崇している。彼らは、良心、信念、正義感、憐れみといった神経回路を温存してきた。

科学の発展によって外なる神も内なる神もともに否定した現代のわれわれは、同時に神話も失ってしまった。2006年の年末に、メタボリック・シンドローム[33]ということばが、当年度の流行語大賞にノミネートされた。このことばは、20世紀栄養学の総決算であるかのように喧伝され、その上に、流行語などとしてもてはやされた。これは神話を否定し、自らも失った人間の愚かさを示すに過ぎない。

ユクタス山のゼウスは、ヴァシペトロ遺跡の中を遠慮なく歩き回るわれわれ極東の研修生をどのように見つめていたのだろうか。ゼウスに答えるためにも、現代人は先史時代の生活を明らかにし、われわれがどこから来てどこへ行くのかを探らねばならないと思う。

あとがき

ヴァシペトロ遺跡の見学を終えて出口にさしかかった時、オレンジ色、長さ約３センチほどの毛虫が一列縦隊をつくって移動しているのに気付いた（写真5）。とりあえずカメラに収めたが、気がかりだったので、次の見学先ゴルティス遺跡の受付けの女性に尋ねた。すると、

「これでしょう？」

といって、まったく同じ毛虫の行列がチケット・ブースのわきを歩いているのを指差した。これは、松の葉の巣で孵化した後、葉を食い荒らし、地面に降りて近くの別の松の木へ向かう行列だそうだ。その時に、一列縦隊を作って移動するのだという。

写真５　ヴァシペトロ遺跡で見られた毛虫の行列

市川市では初夏に大掛かりな殺虫剤を散布して、JR総武線北側の台地縁辺に数キロにわたって連なる黒松をアメリカシロヒトリの害から保護している。殺虫剤撒布の後、一週間ほどは虫一匹も見かけぬ日が続くのを思い出した。

「薬で殺さないのですか？」
と聞くと、受付の三人の若い女性が大笑いをした。
「なぜ、殺す必要があるのか？松の木は平気で育ちますよ」、
ということだった。

ギリシャには森がほとんど無く、山々は裸だが、そのかわり可憐な野の花で知られ、中でもクレタ島がもっとも有名である。とくに春から夏にかけては、遺跡や原野、路傍に色とりどりの草花が咲く。二、三の例をあげると、まずギリシャ名でパパルウナというアザミのなかまの緋色の花が4月にはどの遺跡でも目に付く。コリエスという黄色の棘のある花も綺麗だ。英語名でゴールデン・ドロップというのは、その名の通り、下向きに咲く黄色の花である。こうしてデジカメは、花の写真でいっぱいになってしまった。6000種ほどもあるとのことで、イギリスの35倍だそうである[34)]。

土産物店にはアテネ市内であろうと、田舎の小さな遺跡の売り場であろうと、何種類もの草花の解説書や図鑑[34, 35)]がところ狭しと置かれている。日本では、あまり考えられないので、遺跡研修のたびに、なぜだろうか、と心の片隅に残っていたことである。一方で、アメリカ中流家庭では、前庭の芝生の維持のためにあらゆる雑草駆除剤を散布し、手入れに心血を注いでいることも思い出すのである。

そういえば、と思い当たることがあった。アテネ市内には、野犬が群れをなしているのである。ほとんどが中型犬である。市中心部の広場やパルテノン神殿の入り口には、殊のほか多い。ドイツやフランスからの観光客が捨てて行くのだそうだが、あるとき、なぜ、野犬がこんなに多いのか、野犬狩りをしないのか、日本には野犬はいないし、飼い犬は必ずつないでいる、と言ったことがある。その時、相手のギリシャ人男性は、
「野犬が多くて、何か、悪いですか？」
と怪訝な面持ちで問い返してきた。その人は、
「ロープにつないで置くほうがおかしい」
とも言った。ギリシャ人たちは、野犬を受け入れているのである。発展途上国都市における野犬は、郊外からの他の野生動物の侵入を防ぐという積極的な環境衛生学的な意義がある。しかし、ギリシャ人たちがそれを意識しているとは思われなかった。筆者らは野犬の放置にはもちろん反対するものだが、彼らはごく自然に野犬を受け入れているのである。遺跡の毛虫、草花から市川市の黒松へ、アメリカ中流家庭の芝生からアテネの野犬へと飛ぶイメージからだけでも、人々の心構えに大きな差があることが知れる。すくなくとも現代ギリシャ人たちには、自然に寛容であり、支配しようという気持ちはなさそうである。先史時代を過ぎて古典古代ギリシャ世界を構築したときに、国内外の森林を徹底的に破壊したギリシャ人の心は、長いスパンをもつ歴史のフィードバックか、いつのまにか自然保護に向かっているようであった。

こうして文化文明の表現形はいかようにも変わるが、根源は変化するのだろうか。今でもゼウスはじめ神々への尊崇をミノアの人々と共有しているギリシャ人たちを思えば、ミノア文明はどのように終焉を迎えたのか、いったいそれは本当に終焉だったのか、疑問はますます膨らんできた。

謝辞

ご指導を頂いた日本エーゲ海学会事務局長、東千尋先生（國學院大學名誉教授）、同学会事務局大井一徹先生、カサレヴサの翻訳に際し便宜を図って下さった同学会浅野恭子氏および牧瀬陽子氏ならびにアテネ大学大学院の山口大介氏に厚く御礼申し上げます。

参考文献

1) 矢後長純：「古典古代アテネにおける人類愛の発見と精神の彷徨――人間文化学の戸口に立って」、愛国新聞586号大学版、2000年4月1日、愛国学園。
2) 矢後長純：「人類愛の起源とその成長および成熟」、エーゲ海雑誌、第14号、pp. 13-35、2000年。
3) 齋藤彩香：「ギリシャ研修に参加して」、愛国新聞648号大学版、2005年12月1日、愛国学園。
4) 齋藤彩香：「二回目のギリシャ研修」、愛国新聞第661号大学版、2007年2月1日、愛国学園。
5) 小澤義博：「世界の鳥インフルエンザの現状と新しい対策」、Modern Media、52(11)、pp. 335-342、2006。
6) 日本エーゲ海学会ギリシャ料理研究会エリニコ・ファギト：
http://blogs.yahoo.co.jp/enanumero_omega
7) 周藤芳幸・澤田典子：『古代ギリシャ遺跡事典』、東京堂出版、2004年。
8) Σπυρίδωνος Μαρινάτου、"Ανασκαφαί Βαθυπέτρου Αρχανών (Κρήτης) "、Πρακτικά της Απχαιολογικής Εταιρείος στην Αθήνα、100-109、1949.
9) 周藤芳幸：「ギリシャ考古学事情」、『最新海外考古学事情』（月刊文化財発掘出土情報増刊号）、pp. 25-32、東京、ジャパン通信社、1994年。
10) 周藤芳幸：『ギリシャの考古学』、同成社、東京、1997年。
11) マーティン・バナール：『黒いアテナ――古典文明のアフロ・アジア的ルーツ、II. 考古学と文書にみる証拠』、上下巻、2005、藤原書店、東京。（原書は、Martin Bernal: "Black Athena"、Vol. II、1991。）
12) Blomberg, M., and Henriksson, G.、"Orientations of the late bronze age villa complex at Vathypetro in Crete"、Mediterranean Archeology and Archeometry、Vol. 5、pp. 51-61、2005。
13) Logadou-Platonos, S., and Marinatos, N.,: "Crete (English Edition) "、pp. 165-166、Mathioulakis & Co.、Heraklion、Greece、2003。
14) http://www.academyofathens.gr/
15) Journal of Radioanalytical and Nuclear Chemistry の Vol. 247の３号は、細心技術の考古学への応用に関する特集号である。DNA 分析、X 線、磁気、質量分析、電子スピン、天文学などからの貢献が期待されている。
16) Blomberg, M. and Henrikson, G.: "Archaeoastronomy: New trends in the field, with methods and results from studies in Minoan Crete"、Jour. Radioanalyt. Nuclear Chem.、247, 609-619 , 2001。
17) 長榮一：「クレタ、私の冬の旅――神話と科学を結ぶもの」、エーゲ海雑誌、第9号、pp. 46-50、1995。
18) リリアン・カラリ、ファニス・マヴリーデス著、山口大介訳：「レオンダリ洞窟の発掘調査概要――アッティカ地方イミトス山近郊グリカ・ネラ地域の社会・洞窟居住時期に関する考察」、エーゲ海雑誌、19号、pp. 1-10、2005。
19) Σπυρ. Μαρινάτου、"Το Μέγαρον Βαθηπέτρου"、Πρακτικά της Απχαιολογικής Εταιρείος στην Αθήνα、242-249、1950.
20) Σπυρ. Μαρινάτου、"Ανασκαφή Μέγαρου Βαθυπέτρου (Κρήτης) "、Πρακτικά της Απχαιολογικής Εταιρείος στην Αθήνα、258-272、1951.
21) Σπυρ. Μαρινάτου、"Ανασκαφαί εν Βαθύπετρου,Κρήτης"、Πρακτικά της Απχαιολογικής Εταιρείος στην Αθήνα、592-610、1952.
22) Σπυρ. Μαρινάτου、"Ανασκαφαί ενΒαθηπετρου,Κρητης"、Πρακτικά της Απχαιολογικης Εταιρείος στην Αθήνα、σ.298、1952.
23) Σπυρ. Μαρινάτου、"Ανασκαφαί ενΒαθηπετρου,Κρήτης"、Πρακτικά της Απχαιολογικης Εταιρείος στην Αθήνα、σ.309、1952.
24) Σπυρ. Μαρινάτου、"Ανασκαφαί ενΒαθύπετρω,Αρχάναις και Ιδαίω, Άντρω"、Πρακτικά της Απχαιολογικής Εταιρείος στην Αθήνα、σσ.223-225、1956.
25) 松平千秋：『オデュッセイア』、上下２巻、岩波文庫、1994年。
26) Αγγελική Μπατζόγλου : "Ιστορίες απο την Οδύσσεια", Εκδόσεις Πατάκη, Αθήνα,1998.
27) 斎藤彩香、矢後長純：「激励とは何か――高齢認知症患者へのロボット・セラピーの作用機序とロボット・セラピー・エシックス」、計測自動制御学

会ロボット・セラピー部会、2006年度研究成果発表会において講演、2006年2月25日。
28) 藤縄謙三：『ギリシャ神話の世界観』、新潮選書、新潮社、東京、1960年。
29) ガストン・バシュラール著、及川　馥訳：『夢想の詩学』、筑摩書房、2004年。（原書は、Gaston Bachelard: “La Poetique de la Reverie”、Presse Universitaires de France)。
30) 村本治：『神の神経学』、新生出版、東京、2004年。
31) 西田幾多郎：『善の研究』、岩波文庫、東京、1950年。
32) 矢後長純・福田信男：「意識の原初の構造――生体システム論は西田幾多郎『善の研究』の純粋経験をどう考えるか」、愛国学園短期大学紀要、１６、pp. 1-19、1999年.
33) メタボリックシンドローム診断基準検討委員会、２００５：「メタボリッシンドロームの定義と診断基準」、日本内科学雑誌、Vol. 94(４)、794-809、2005年。
34) Sfikas, G.：“Wild flowers of Greece”、Efstathiadis Group S.A.、Athens、2001。
35) Antonis, A.：“Kphth — — The Gorge of Samaria and its plants”、Published and distributed by the author、Heraklion、Crete、1994。

校正刷りへの追記

1　本稿の著者校正中に、日本エーゲ海学会武正正子氏より、『クレタ文明讃歌』（株式会社サイエンジング発行、1996年、東京）という書籍を紹介された。同書 pp. 153-154には、著者加藤静雄氏（日本ギリシャ協会会員、開業医）が、1991年9月にヴァシペトロ遺跡を訪問されたことが記載されていたので、ここに付記する。

2　本文中のギリシャ文字ならびに参考文献8)、19)～24) および26) のギリシャ文字は原文ではカサレヴサだが、本稿では便宜上、現代ギリシャ語のトーヌスを付してある。